

博 士 学 位 論 文

— 論文要旨および審査結果の要旨 —

第 8 号

武蔵野音楽大学

は し が き

本編は学位規則(平成25年文部科学省令第5号)第8条による公表を目的として、平成26年度本学において博士(音楽)および博士(音楽学)の学位を授与した者の論文の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏 名	論文題目	頁
博甲第 15 号	博士 (音楽学)	中 村 良	ルイ 14 世治世下の王立音楽アカデミー (1671-1715) で上演された劇場作品における舞曲 — 印刷資料に基づく統計的観点による考察 —	1
博甲第 16 号	博士 (音楽)	鈴 木 雅 之	スズキ・メソードにおける指導者の指導観	4

氏名	なかむら 中 村 良
学位の種類	博士 (音楽学)
学位記番号	博甲第 15 号
学位授与日	平成 27 年 5 月 16 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条の 1
学位論文題目	ルイ 14 世治世下の王立音楽アカデミー (1671-1715) で上演された 劇場作品における舞曲 — 印刷資料に基づく統計的観点による考察 —
論文審査委員	主査 教授 寺 本 まり子 副査 教授 樽 崎 洋 子 副査 講師 福 田 弥 副査 講師 石 井 明 副査 荒 川 恒 子 (山梨大学名誉教授)

論 文 要 旨

本論は、ダンスの伴奏音楽として作曲されたバロック舞曲の種類 (以下舞踏種と称す) それぞれの性質を、ルイ 14 世治世下の王立音楽アカデミーで上演された劇場作品に含まれる楽曲の分析によって明らかにすることを試みるものである。既存のバロック舞曲を対象とする研究は、主に器楽曲として作曲された曲の演奏解釈に関する側面が注目されていた一方で、ダンスの伴奏音楽としての舞踏種それぞれの形式や音形といった形態的特徴については、言説研究による曖昧な根拠に基づいた概念が共有されたまま等閑視されてきた。本論は研究対象とする舞踏種を 2 拍子系のブーレ、リゴドン、ガヴォット、3 拍子系のメヌエット、パスピエ、サラバンド、複合拍子系のジグ、カナリー、ルールに限定し、ルイ 14 世治世下に王立音楽アカデミーで上演された劇場作品に含まれるこれらの舞曲から、それぞれの舞踏種を特徴づける要素を明らかにすることを試みた。その際、従来の研究が舞踏種それぞれの形態を漠然とした表現で言い表していたのに対し、本論では各要素を統計的に分析し、固有の特徴に具体的な数値的裏づけを持たせると同時に、今まで類似するとされてきた舞踏種の区別を付けることも目指した。

分析にあたって楽曲は、1671 年から 1715 年に出版されたフル・スコアおよびスケルトン・スコアが存在する、22 人の作曲家による 73 作品から、9 種類の舞踏種を抽出した。研究対象楽曲の選定基準は、楽曲のタイトルにこれらの舞踏種の名称を含むもの全てとした。

舞踏種の分析にあたっては、用いられる拍子記号と実質的拍子、アウフタクトの形態 (拍

数およびリズム型)、形式、リズム型、使用される速度標語、テクスチュアといった、楽譜テキストから読み取れる形態的側面を分析の対象とした。このうちリズムは、楽曲を通して支配的な型と、要所で用いられて舞曲を特徴付けるものに分けて考察する。楽曲を拍ごとに区切ったうえで、前者は1つの楽曲全体における使用頻度、後者は研究対象楽曲のコーパス全体に対して用いられる楽曲の数からその実態を明らかにした。

分析の結果は、何れも例外的な存在があるものの、舞踏種ごとに要素ごとのデータの偏りを示し、それぞれで舞踏種固有の特徴とみなせるものが見出された。その一方で、9種類の舞踏種全てに共通している要素も確認できた。全ての舞踏種は二部形式で作曲される割合が60%を超え、複数の楽曲が組になって作曲される例が多かった。楽曲冒頭での旋律声部とバスの時間差的開始(模倣的書法を含む)、3声による書法、持続音でのミュゼットの模倣は、いずれも従来は一部の舞踏種のみでその使用が指摘されていたが、本論の研究範囲では種類によって割合に差があるものの、複数の舞踏種で用いられていることが明らかになった。

2拍子系舞踏種の統計結果は、ガヴォットは四分音符2つ分、その他は1つ分のアウフタクトを持つという点で区別が可能であることを示した。シンコペーションはブーレの特徴とされていたが、これは全てのブーレで使用されているわけではない。一方で、リゴドンとガヴォットでは一切用いられていなかった。リゴドンは、1小節に二分音符2つが並ぶリズム型が特徴として明らかになり、これは全てのリゴドン(組になったものではいずれか)で必ず観察された。楽曲を通して用いられる支配的なパターンはいずれにも見られなかった。

3拍子系の舞踏種の統計結果は、メヌエットとサラバンドは四分音符を基準とし殆どがアウフタクトを持たない一方で、パスピエは八分音符を基準とし8割程度がアウフタクトを持つことを示した。3種類全ての舞踏種の大半で、形式の各部分の終止の1つ前の小節は短長のリズムが用いられていることが明らかになったが、一方で終止の小節でサラバンドは女性終止する楽曲が半数程度あった。旋律のヘミオラはどの舞踏種においても観察されたが、パスピエで際立って多かった。サラバンドに特徴的とされる2拍目が付点のリズムは、サラバンドで確かに用いられている頻度が高いが、一方で1拍目が付点のリズムも同じ程度含まれ、この二つが組み合わさったリズムが楽曲全体を支配する例もあった。

複合拍子系の舞曲は、総じて1拍目が付点のリズムが楽曲全体で支配的であった。その使用率はジークよりもカナリーの方が高い割合を出している一方で、ルールは他のリズム型の使用も観察された。アウフタクトの形状は、ジークは主要拍の半分の長さの「短長」のアウフタクトで開始されることが多い一方で、カナリーは必ず主要拍の冒頭で開始されていた。

本論の分析結果はあくまでも伴奏舞曲として作曲された作品の統計によるものであるが、従来曖昧に処理されてきたバロック舞曲の舞踏種それぞれの固有の特徴の存在を、数値的な裏づけを以って明らかにすることができた。

論文審査結果の要旨

申請者の博士論文は、ダンスの伴奏音楽として作曲されたバロック舞曲の形態的特徴を、ルイ 14 世治世下の王立音楽アカデミーで上演された劇場作品に含まれる、舞曲タイトルが付された楽曲の分析によって明らかにすることを試みたものである。主としてフランス国立図書館のサイトにアップロードされた、1671 年から 1715 年に出版されたフル・スコアおよびスケルトン・スコアから、22 人の作曲家による 88 作品について、9 の舞踏種 (2 拍子系 3 種、3 拍子系 3 種、複合拍子系 3 種) に焦点を当ててデータを収集、分析した後、それぞれの舞踏種に固有の特徴を統計的手法によって明らかにしている。

17 世紀末から 18 世紀初期にかけてのフランスで書かれた舞曲を包括的に考察する研究はこれまで行われてこなかったという点において、本論文の着眼点は興味深く、研究の視点は優れている。そして、実際に踊られる楽曲を対象とした点で新しさを持つこの研究は、舞踏種舞曲を数量の面から網羅的に、統計的に考察するという研究方法の面でも独自性があり、言説に重点を置いた従来の研究、あるいはいわゆる様式化された後の器楽舞曲からの研究では曖昧にされ、見落とされがちであった、各舞踏種の差異や形態的特徴を明らかにすることに成功している。

予備審査の後、各章最後の総括を深めることによって、論文の結論の充実が図られ、新しい知見が強調され、本論文の独自性、意義が明確化された。各章では、特徴が表にまとめられ、予備審査論文では読みにくかった表は色で識別され、さらに各舞踏種の最後には典型例が譜例と共に述べられるなど、多くの改善点が見られる。しかし、申請者の分析と統計を通して明らかになった点を踏まえた、より積極的な論述があれば、論文により一層の説得力が与えられたであろう。

また、このような実際の曲を扱った後半部分の充実に対して、先行研究、研究対象、分析方法等を論じた前半部分、特に第 3 章までの部分にはまだ文章表現の点での読みにくさ、説明不足、あるいはその逆に表現の重複も目立つ。この前半部分に関しては表現を精査して、場合によっては内容を圧縮することも望まれるであろう。しかし、以上のような改善すべき点はあるものの、本論文は研究の方法論における独自性と結論の有用性、論文自体の論理性・論証性の点で評価できる内容であり、課程博士の称号を授与するに値する水準には十分に達していると判断できる。

博士学位論文 論文要旨および審査結果の要旨 (第8号)

平成27年8月5日発行

発行 武蔵野音楽大学大学院
編集 武蔵野音楽大学学務部
〒176-8521 東京都練馬区羽沢 1-13-1
電話 03-3992-1128
